
届かぬ思いでも.....

hope

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届かぬ思いでも……

【Nコード】

N4310T

【作者名】

hope

【あらすじ】

帝丹高校に編入した上杉麻梨愛は、過去の恩人である工藤新一と再会。しかし、新一には相思相愛の相手、毛利蘭がいると知る。そして、新一への感謝は、いつしか恋心へと変わり……。その思いは悲劇へと変わってゆく……

CPは新蘭です。

1・過去の思い

「上杉麻梨愛うえすぎまりあです。よろしくお願いします……」

帝丹高校3・Dの教室は、騒ぎ出した。

途端に込み上げた感情。恐怖。

やっぱり、転校は目立っちゃうかな……。

私、上杉麻梨愛は、小学校6年生のとき、母親を殺された。父親に。その後、賢橋町の祖父母の家で今まで過ごし。

しかし、ある日、一千万円の小切手が私宛てに届いた。差出人は、上杉義雄。牢獄の父親だった。小切手には手紙が添えられていて、それには

「これで帝丹高校にでも行きなさい」とあった。

私は、小学生の時、帝丹中学を受験しようと思っていた。壊れた夢を、父親は叶えてくれようとしていた。

父親は父親。私はその厚意に甘えたくて、ここへと向かった。でも、やはり家庭事情は知られたくない。

その時は、思ってもいなかった……

遠い記憶が甦り、新たな傷を生む事になるなんて……

——えあーらく賢橋店——

ここ、えあーらく賢橋店は、私が高校生になってからずっと働いてる場所だ。

4時から8時まで働いて、時給千円。一ヶ月続ければ、十二万円程度だ。

でも……その思いが引き起こす惨劇を、私が知るはずない。

2・あの時の人

数学の授業。眠い。分らない。数学教師を好きになった試しがない。さつさと終われー。そう思ってた時。

前の人からメモがまわってきた。

「この学校の裏校則を教えます□

一、工藤新一と毛利蘭が夫婦であることを忘れるべからず。

一、二人が一緒にいるときはからかうよう、心掛けるべし。

一、二人の絆を後世まで伝えるよう、努力すべし。

以上です□分からない事があつたら、3-D鈴木園子まで。健闘を祈りまゝす」

正直に言う。ドン引きした……この鈴木って子がこの学校を牛耳ってんのか……だから言いたい放題なわけね……

……そもそも毛利って誰？

――翌日――

朝、学校に行くと、工藤君がいた。

「工藤君……！」

「あ……おめえ……あの時の……」

バ、バカ！！私の事、何も言わないでよ！！バカ、バカ、バカ、バカ、バカ……！！

「外で話すか。」

え……あ……はい……

でも、ヤバくね？それ……

女子軍が怖い……

仕方ない、「とある事件の目撃者」という設定にしよう……
本当は一切バレたくないのに！！

――屋上――

「え〜っと、上杉麻梨愛だっけ？」

「あ、はい！よく覚えてましたね……」

「ああ。苗字が戦国大名みたいなのに、名前が西洋っぽかったから、ガキの頃、印象に残った。」

そういう物か？おい？

「ところでお前、あ後はどうしてたんだ？」

「賢橋町の祖父母の家で今まで過ごしました。労働基準法で働く事が許される、高校生になってからバイトを始めました。でも、この前、父から一千万が届きました。これで帝丹高校へ行けと。小学生時代、帝丹中学を受験しようと試みていた事を父が覚えていてくれて、帝丹中学から進学する可能性の高い帝丹高校に……それで感動し、帝丹高校に入らなければと思い、現在は米花町のボロアパートに一人暮らしです。生活費はバイト代です。」

「そっか……大変だな、お前も。まあ、頑張れよ！あ、もうチャイム鳴るな。行くぞ！」

「あ……あの……」

「ん？何だ？」

「事件の時は、私に『ひとりぼっち』じゃないと言ってもらえて……あの時は、本当にありがとうございました！！」

「そっか……いえいえ。」

「あ、あと……私の過去、誰にも教えないで下さい！！お願いしま

す!!」

「わかってる。」

工藤君……

本気で嬉しかった。安心した。この時は。それだけの思いでよかったのに……ね……

「上杉さん、新一君と何を話してたのかな？」
ほら来た……

「私が以前目撃者となった事件に工藤君が関わっていたんです。それだけです……」

「そ。」

やっぱ不信感抱かせちゃったかな……

——えあ——く——

「何か疲れた顔してるけど、どうした？」

「もしかしたらクラスの女子の恨みを買ってしまったかもしれないけど……」「大丈夫!?でも、あんた何かしでかしたの?」「工藤新一と相思相愛の相手がいるらしく、その二人をからかえと言われたんですけど、次の日に工藤君に屋上に連れられて、事件の後、どうしてたか聞かれて、ついには私もあの時のお礼を言ったんですけど、やはり怪しまれたみたいで……」

「で、バレてないの?」

「はい。何とかごまかしました。」

「そう。よかった。」

やっぱりここは、いついかなる時も安らぎの場だな。

そう、きっと永遠に……

3・堕ちた瞬間

そもそも毛利蘭と会ってないのに、

「工藤新一と毛利蘭はナンチャラカンチャラ」
言われても、さっぱり意味がわからん……。

そんなことを考えてたから、ああなっちゃったのかな……

——えあ——く——

「ところで、結局麻梨愛は工藤新一が好きなの？」

「へ？……いや、好きじゃないですよ……ただの恩人です……」
「ふん……」

武田さんがニヤリと笑った。

「上杉さん、16番テーブルお願いします！」

「あ、はい！」

注文ね……

「お待たせしま………」
16番テーブルは、

工藤君と、鈴木さんと、ロングヘアの女だった。

「麻梨愛ちゃん！こ、ここでバイトしてるの？」

…… ロングヘアーの女に言われた。…… 普通、初対面の人間に「麻梨愛ちゃん」なんて言うか？っていうか、誰？

工藤君と鈴木さんというって事は…… まさかこの馴れ馴れしいロングヘアーが毛利蘭！？

……

「あ、とにかくご注文……」

「ああ。カレーライス二つ、アラビーター一つで頼む。」

「はい。カレーライス二つ、アラビーター一つでよろしいですね？」
「ん。」

あの女が毛利蘭……。

そして、今、工藤君に対して今までにはなかった種の苦しさを感じた。

まさか…… 武田さんが言ってた事が本当になった…… はず…… ないよね？

「上杉さん、これを16番テーブルにお願い。」
伊達さんが言った。

「はい……」

「…… どうしたの？」

「16番テーブルがクラスメートで……」

「…… 変わろうか？」

「え……あ……いえ………大丈夫です!!」

いけないいけない……ダメだよ、伊達さんに迷惑かけたら。でも…

…やっぱり根はいい人だな……

正直、学校の人って何者か分からない。

鈴木さんは学校を我が物顔で牛耳ってる感じ。毛利さんにいたっては……

そんなことを考えながら、16番テーブルに行った。

「お待たせしました。カレーライス二つ、アラビアターです。」

「ん。サンキュ。」

工藤君……

胸の奥がほんわかする……

やっぱり……

「ありがとう、麻梨愛ちゃん!!」

毛利さん……やっぱり素性がわからん……

「いえ。ごゆっくりして行って下さい。」

私は、逃げる様に16番テーブルから離れた。

工藤君……

工藤君に……恋なんてしたくないよ……

4・勝つための手段

毛利蘭って……一体何者！？

童顔だけど美人（と言うよりは美少女か？）で、やたらスタイルがいい。運動神経抜群で、勉強もまあまあ出来る。欠点が無いのが欠点っていうパターン……。

この女はすぐに私のコンプレックスと化した。

「文化祭で、我がクラスは模擬店をやることになりました！！イエー！！！」

鈴木さんが異常なテンションだ。確かに行事とか好きそうだな……。

「まず、店名を決めます！！何かいいのありますか？何でも言っ下さーい！！！」

一本の手が、真っすぐに拳がった。

……え！？工藤君！？

全神経を耳に集中させた。

「ベイカー街！！いい名前だろ？」

……工藤君？それって……確か……

「新一？何、またホームズ！？あなた、ホームズから離れた事ないの？」

毛利さんだった……。やっぱり……“幼なじみ”って……

「るせーなー……」

工藤君が顔を赤らめた。

苦しいよ……胸が痛い。

他にも候補が挙がったけど、「ベイカー街」の文字だけはなぜか光って見えた。

一枚の小さな紙が配られた。これに自分が選んだものを書けらしい。

私は迷わず書いた。

「ベイカー街」

結果、店名は「ベイカー街」となった。何で人気があったのかな、と思う一方で込み上げてくる嬉しさ。喜んでいる工藤君を見ると、自分の事のように嬉しく感じる。

明日、担当を決めるらしい。

—えあーらーく—

「へへ、よかったじゃない!」

「え?何が……ですか?」

「模擬店って事が。いいアピールになるんじゃないの?」

「でも……」

「でも、何?」

「いや、リーダー的な目立つ事をやるのは怖くて……女子の集団が

……」

「そっか……」

小中学生の時、いじめにあっていた。だから、女子の集団は本当に怖い。

「さりげなくアピールしないといけないのか……確かに大変ね……
あ、雑用とかどう!?皿洗いとかの!!!良いとこ見せられるんじゃない!?!」

……！！

「そうですね！！」

「でしょ□」

翌日のHRの時間。

「では、『ベイカー街』の係を決めまゝす！！」

“ウエイトレス”とか“会計”とか“シェフ”とか並んでる中、私の狙いはたった一つ

雑用

よし、あつた！！雑用があつた！！

「じゃあ、決めていきます！！」

「雑用やりたい人いますか？」

誰もやらないだろうという空気の中、私は一人、手を挙げた。

5・危険な出会い

結局、雑用に手を挙げたのは私だけだった。
いいところが見せられる!!

そう……思ってたんだ……

「一人しかやらないなら、私もやるよ!!」
最も聞きたくない、耳障りな声が、耳に鋭利な刃物を突き刺す。

どうして……? あんたは……? どんだけいい子ぶれば気が済むの……?
そんなこと…… あんたがする必要なんて…… 無いでしょう!?

あんたは完璧でしょ。雑用なんて、影の仕事をする理由がどこにあるの?

ウェイトレスは?

何? その顔もボディも、助平軍団やや女子仲間、工藤君のためだけに
そうね。お客様達とは、文化祭の日だけの付き合い。誘惑したところ
で、無駄よね。

シェフは?

どうせあんたは料理だって、三ツ星レストラン以上の物を作れるんでしょ?

これも、説明がつく。助平軍団や女子仲間、工藤君以外の愚かなる人間共に、自分の料理を「おいしい」って思われたく無いんじゃないの?

この時から、“嫉妬”は、少しずつ、一種の鉄球へと変わって行ったのだと、思う。
そう。棘を纏う、鉄球に。

「モウリヲキズツケタトコロデ、アンタモキズツクカモネ……」

……誰？

これが、出会いだった。

私はこの時、聖母の名を持つ悪魔と出会った。

―文化祭当日―

「ベイカー街」は、大繁盛だった。
まあ、客はほとんど、

「生身の工藤君に逢ってみたい□」
とか、

毛利の誘惑を受けた奴らとか……

ガチャン!!

皿が割れる音だった。
割ったのは、毛利。

「ご、ごめんなさい!!すぐに……直ぐに片付けます!!」
あたふたする様子は、まるで「ドジッ娘メイド」そのものだった。
……あんた、こんなとこにいないで、秋葉でコスプレして街ん中踊れば?顔もロリ顔だし。

考えてることやってることが違うというのは、まさに今の私だった。

「動かないで!!片付けるから!!」
私は周りを制止した。

沈黙の中で、一人黙々と割れた皿のかけらを拾い集める。

――約一分後――

「これで大丈夫です。仕事に戻って下さい。」
この行動は、誰のためだったか解らなかった。
「蘭……怪我してねえか?」

この一言までは。

今私がやったことは、工藤君のためだったんだね。そして、私には

見向きもしないんだね。

「ウザいよね。ウザいよね、毛利の存在。あいつさえいなければ、あんたは幸せになれる希望を、失わずにすんだのにね。」

……誰？

あの時の声。

ねえ、誰がそこにいるの？

でも、この声に気付かないでいる周りの人々に、不可解な声の主の正体は聞けなかった。

6・レヴィアタン

文化祭は終わった。それは同時に、私に残った勝ち目が消えた事を暗喩する。

クラスで打ち上げをやるらしいが、私の足は屋上へと向かった。

―屋上―

誰もいないよね？

一人になれるよね？

「お人よしにも程があるわよ。」

……誰！？……さっきの声と同じ……この人……

「さあね。あなた自身で答えを見つけなさい。……まあ……強いて

言うなら……レヴィアタン。嫉妬の悪魔よ。……いや、あなたは私

上杉麻梨愛＝私。」

………

「これ以上の説明は難しいわ。」

私＝こいつ＝レヴィアタン……？

ますます解らん。

「あんたの嫉妬心の塊が私ってどこかしら？」

……えっと……

解ったのか……解ってないのか……

「あんた、『嫉妬』に過敏に反応してんじゃない？自分に『嫉妬』なんてないと。」

言ってる事が意味不明よ。

「傲慢、傲慢□……くすくすっ」

怖くなってきた。こいつは私をどうしたいの？

「上杉……！！そこにいたのかよ……」

「く……工藤君！？」

うそ……何でここに彼が??

「一人で逃げ出して……何がやりてえんだよ？」

一人になりたかった……それだけだよ？

でも、そんなこと言えず。

「ごめんなさい……」

「いや、別に……とりあえず、打ち上げ行かねえか？今日のMVPはお前だし……」

「え！？」

顔が紅潮する。自分でもわかる。……。

「お前が蘭を助けてくれた。」

……何回目？

たった八時間程度で。何度傷付いた？

「どうした？」

「怒りなさいよ。麻梨愛。毛利を応援したいはず、無いでしょ？

あなたの心は今、嫉妬でいっぱい。どう？間違ってる？正しいわよね。あなたは今、嫉妬でドッロドロ。でも、押し殺すのね。

感情が顔に出るタイプのくせに。

工藤新一争奪戦なんて、お人よしのバカとお人よしのアホのぶつかり合い。それだけ。

バカねえ。」

合っている。こいつが、“マリア”が言っている事に、間違い等無

い。

でも……何処か悔しくて、悔しくて。

自分が何に対して怒っているのか。それさえも解らず。

「私、打ち上げに行くつもりはありません。工藤君、一人で行ってきて下さい。」

「あ……ああ……でも……何で……行かねえんだ？」

「まあ……いろいろあつて。」

「……分かった。じゃあ、行ってくる。」

「はい。」

求めていたものは、一人になることを赦される選択。

……ただ一人で……泣きたかった。
……それだけ。

“マリア”という名を持つレヴィアタンは、美しく、残酷な笑みを
浮かべる。

7 人間としての思い（前書き）

Happy birthday 快斗!!

7・人間としての思い

「ねえ、麻梨愛ちゃん？どうして打ち上げに来なかったの？」

最悪だ。

最も嫌な奴に

最も嫌な事を聞かれるなんて。

最低よ……最低……最悪………

「何か悩みがあったら、私に遠慮なく相談しなよ？」

「じゃあ、工藤君を捨てて、麻梨愛に渡しなさいよ……この……偽善者がッー！」

恐ろしいくらいに丁寧に、忠実に、彼女は私の気持ちを代弁してくれる。

だいたい解ってきた。マリアについて。

私は昔から“人には直接言えない悪口”が多く、その言葉は心の中で推敲された後に何度も繰り返され、それで自己満足していたのだ。

そして、マリアは、その台詞を私に吐露する私自身。

自分に対する罵倒。
これもマリア。

「……麻梨愛ちゃん？大丈夫？」

「……ったく……みんながみんな、お市の方を殺した秀吉の側室になった茶々と同じだと思ふなよ……」

私は日本史が好きだ。

だからマリアがこのような口をたたく。

「私達は……麻梨愛ちゃんの味方だよ？」

……うぜえ。

マジでうぜえ。

「こいつ、焼き鳥にして食っちゃおうぜ？」
そうだね。

——えあ——く——

「そっか……ダメだったか……」

「はい……」

あの日を語ると、自然と涙が目に浮かんでくる。
その日は一日中、えあ——くなくでも無言だった。

―翌日―

「麻梨愛ちゃん、おはよう!!」

「朝から元気ね……10時間寝てんの？」

「……おはよう……」

「あんた、お人よしね。普通はしゃべらねーぞ？」

そついう性格なんです。自分でもバカだと思っただけど……

「アダムとエバは、“好奇心”によって樂園を追放された。麻梨愛は、“恋心”によって樂園を追放された……。人間が本来持つ思いは、時に人間を樂園から追放する力となる……。ってこと。本来憧れていたこの学校は、無駄な思い一つで樂園ではなくなった……。」

そつか……

こんな一つの小さな思いだけで……。

もうここは、楽園ではない。

過去の聖地が、苦しみを与える場となるなんて……。

「恋心は強欲へ、色欲へ、そして嫉妬へ。その成れの果ては何でしょう？」

……あんたよ。

強欲の、色欲の、嫉妬の成れの果てが……あんたよ。

8・七つの大罪（前書き）

カインとアベル

……旧約聖書の最初の人類、アダムとエバの息子達。カインがアベルを嫉妬し、殺害した。

七つの大罪

……傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲。

8・七つの大罪

「うぜーうぜーうぜーうぜーうぜーうぜー……」

もちろん、毛利の事。

「ったくよお、どう考えてもおかしいだろーがよお……どうして麻梨愛に声掛けんだよ……」

口が悪いな……

って、私自身か。

学校か…… かつたりい……

――帝丹高校――

「麻梨愛ちゃん、おっはよー!!」

「麻梨愛が中耳炎になった時の、あんたの慌てる顔が見たいわ。」

「……おはよう……」

「何か疲れてない?大丈夫?」

「そりゃあ、騒音公害に悩まされてますからねえ。」

これが、いつもの朝なのだ。

「カインがアベルを殺したのは、嫉妬がきっかけ。嫉妬は殺意にもなる……」

……殺意……

殺意なんか芽生えてない。

「強がつてるねえ。恋するじゃん？まずは『色欲』、『強欲』。そして『嫉妬』と、それが少しズレれば『憤怒』にも。見栄をはって『傲慢』にもなるかもね。ストレスが溜まれば『暴食』に。問題です。七つの大罪をいくつ犯しているでしょうか？」

……怠惰以外の……全て……

「ピンポン♪恋って面白いねえ」

……でも……それは……恋の事。私の事だけじゃない……

「だから傲慢って言うてるのに……素直になればいいものを……」

るさい！！

あんたには関係無いでしょ？

「もしかして、上杉麻梨愛」私って、忘れちゃったあ？」

……ッ……

マリアか。結局、私の一番の理解者はマリアか。

なんか悔しいけど……

当たり前の日々なんて、いつか壊れる。

「麻梨愛ちゃん、おはよう！ー！」

「……おはよう……」

「ねえ、聞いたんだけどさ……」

すごい不安そうな顔だった……

「は？何を？」

「麻梨愛ちゃんのお母さんって……麻梨愛ちゃんのお父さんに……」

後の言葉は、もう聞こえちゃいない。

「嘘だっ！！毛利が知ってるはずなんて……ない！！！！！！有
り得ない！！だって……その事は……」

私と……工藤君しか……

知らないはず……

「どうして毛利が知ってんの！？……毛利は……誰に……その事を
聞いたのよ……」

信賴してたのに……

毛利も工藤も……
「絶対に許さない……」

9・あの真実

学校を休む。

代わりに図書館に寄って、推理小説を読み耽る。

夕方にはえあーらーくに行く。

三日間、ずっとこれ。

「これは特殊な場所が必要だからダメ……」
こっちは心理トリックだからダメ……

毛利と工藤を……

その方法を……

三日間、ずっとこれ。

その日の夜だった。

家で某推理小説作家の全集を読みふけていた時、チャイムが鳴った。

「はい……」

殺意の対象だった。

扉を開けた途端に入ってきたのは。

「……………!」

「上がらせて貰うぜ。」

「あ……ちょ……」

「不法侵入ね……プライベート侵害もいいところ。ま、死刑になるからどうでもいい……俺が話したいのは、六年前の事件の事だ。」

「……………な……」

「聞きたくなかったら……耳を塞げ。」

「あんたの口にガムテ巻けばいいじゃない……」

「……………」

塞ぐ気にはなれなかった。

私を傷付けるかも知れない情報だとしても……

聞きたかった……

「こないだ、ある犯罪組織Xが摘発された。その組織は、お前の父親に罪を着せた。」

「え……じゃあ……お父さんは濡れ衣なの? だったら釈放して!! 今すぐお父さんを返して!!!!!!」

「……無理だ。お前の父親は……お前の母親と共に、その組織内にいたんだ。そこで詐欺とかはしている。だから……罪を犯した事に変わりはない。……ヤクザとかにも通じていたらしいぜ。」

「……そんな……」

じゃあ……あの大金は……

「蘭の父親が警察やって。言っといてやろうと思ったんだ。……じゃあ。俺は帰るから。……あと、最後に一つ。……がんばれよ……」

目頭が熱くなった。

彼は私を好きではない。

……解っているのに……

冷めなかった。

むしろ……熱くなった。

工藤君への思いは。

ごめんなさい。

疑って、ごめんなさい。

そして……“嫉妬”じゃ済まされない強い思いを感じた。

ターゲットが、一人減った。それだけ。

私は、全集に再び目を通す。

頭に流れる、工藤君のあの言葉。

六年前も……工藤君が支えてくれたね。

“思い込みほど、信用ならないものはない”

……思い込み……

工藤君は……ただ同情してくれただけなのに……
私は……勝手に誤解していた……？

……嫌だ。

……みじめすぎる。

この不公平な世の中で……

私は……何のために……こんな思いを抱いているの……？

恋Ⅱ色欲Ⅱ生殖Ⅱ子孫繁栄

なら……どうして失恋なんて……どうして恋愛に勝者と敗者が存在

するの？

どうして……絶対の勝者が、毛利が……いるの？

それ以外が皆敗者なら……どうして工藤君に恋する女が存在するの……？

こんな無駄な事の為に……なんで泣いてんだろね……。

「前から言ってんじゃん……こ・ろ・せ・ば・い・い……ってね……」

………

「アハハハハッ！！」

10・導き出した答え

今、私の目の前に。

眠らせた毛利が横たわっている。

殺意の対象が。

私は屋上に毛利を呼び寄せ、睡眠薬で眠らせた。

こいつの最期の言葉は

『麻梨愛ちゃん、どうしたの？』
でしたよ。

毛利の靴を脱がせて揃え、フェンスの前に置いた。

後は……

突き落とすだけ。

それで終わり。

自己中？

謝れ？

最低の女？
貴様こそ死ね？

……知らないわよ、そんなこと。

だって……

私を選んだ道だもん。

……コウシナイトシアワセニナレナイ……………。

ただの嫉妬だった。それだけだった。
いつの間にか、殺意に変わっていて

だから、私はこの答えを導き出した。

「さ、さっさと突き落とさないか」
はい。

毛利の体に手を触れる。

……………。

「……つじしたの？」

……………。

……何だろう、この気持ち……

「……ちよっとなに固まっちゃってんの？」

……無理。

「は？」

……殺せ……ない……

「な、何言っちゃってんのよこのボケナスがつー！」

……。

マリアの声よりも、思い出の中の工藤君の声が聞こえてくる。

……私が、毛利を殺したら。

工藤君は……そんな私を好きになる……？

そんなはずない。

「あんたバカア？だから自殺に見せかけてるんでしょう！？」

……でも、工藤君は……それで幸せになれる？

「あんたと幸せになるのよー！」

私がマリアにここまで反論するなんて……

行動も、同じだった。

私は毛利に靴を履かせていた。

「あつ……あんたねえ……分かってんの!? あんたが幸せになるためなのよ!? どうして殺さないのよ!? あんたの頭どうにかしてるわよ!」

どうにかしてるから……こんな事するんでしょ!?

「は！？あんた何言つて」

マリアが言った時にはすでに遅し。
フェンスを越えたのは、

私だつた。

「ちよつと！？馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！！！！！
この鬼畜変人っ！！」

そうだよ。鬼畜変人だよ。だから……

生きる価値なんて、一文も無い。

「やめてっ！！」

嫌だ。

「死なないでっー!!」

……ごめんね、マリア。

私を、麻梨愛を……許して。

「い……や……」

「……上杉麻梨愛は、工藤新一君を愛していました。」

「ねえ……ちょっと……」

「貴方の幸せを……願えてたら……良かったのに……」

「ごめんね。……でも……」

目を閉じる。

自然と口角が上がる。

でも、目頭が熱い。

「ありがとう。そして……」

神よ、聞け。

上杉麻梨愛の……最後の言葉を……。

「さようなら。」

私は、身体をゆっくりと倒した。

10・導き出した答え（後書き）

多分次で最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310t/>

届かぬ思いでも……

2011年10月9日03時03分発行